# 滅びの風

栗本 薫

# 栗本薫

検印廃止

滅びの風

一九八八年十一月十五日　初版発行
一九八九年一月十五日　再版発行

定価　一二〇〇円

著者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　早川清
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京（二五二）三一一（大代表）
振替番号　東京・六〇四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-203376-2 C0093

# 滅びの風

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

滅びの風 5
滅びの風Ⅱ 39
巨象の道 111
コギト 169
反歌 229
あとがき 243

# 滅びの風

# 1

朝、自分のベッドで目をさましたとき、リーはその日がなぜ他の一日とちがっているのか、理解できなかった。

彼は固い寝台に横になったまま、しばらく考えをもてあそんでいた。となりの寝台に、向うをむいて眠っている妻の背中が規則正しく上下している。何か、特別な日であることは確かだ、と思う。仕事が休みではないこともまた、はっきりしていた。何十年も、勤め人として生活してきた人間の本能は、休日にはからだじゅうの力をすっかり休め、スイッチを切ってしまうことにおいて、決してまちがえない。同時に五感が、きょうがふつうの日であることをもたしかにとらえている。壁一枚へだてた外のざわめきは、ずっとつづいてきた毎朝のそれと、悲しいまでにかわっていないのだ。

では、仕事が休みだとか、国民の祝日だ、というわけではない。とすれば——家族の誕生日か、結婚記念日か。

違った。妻の誕生日は春で、彼のも同じ、そして一人息子の誕生日は——来年の夏でやっと六回目

の――夏のあついさかりだった。いつも、それで、息子のリロイは、誕生日のパーティーをプールサイドでやってくれと、両親にせがむのだ。

結婚記念日は――まずいことに、リーには、それが思い出せなかった。なんだか、物心ついてからずっと結婚していたような気さえする。記念日を祝う習慣はいつとはなしに家族の誕生日にとってかわられており、それをよいことに、彼はそれをすっかり忘れてしまっていたのだ。ばれたら、ひと悶着になるかもしれないが、しかし、少くなくともきょうがそうだというのでないことだけは断言できた。

というのは、そう、結婚したあとかれらはジェット・スキーに出かけたし――ということは、かれらが結婚したのは冬なのだ――そしていまは、かれが突然数ヶ月をとびこえてしまったのでなければ、ようやく夏の炎熱が去って、一年でいちばん美しいとき――秋が世界におとずれたときであったからだ。きのうの昼休みに、散歩に出てそんな話をしたので、それはたしかなことだった。いまは、秋のさかりなのだ。

とすれば――誕生日でも、結婚記念日でも、職場の記念日でもないとすれば、いったい何なのだろう――頭を再びそこにひきもどして、かれは考えつづけた。特別な気分――何か、祝祭めいた、どきどきするたかぶりは、気のせいとしてすましてしまうには、あまりにくっきりと、目ざめた瞬間の最初のふるえる心のままにのこっていた。

それも、いやな〝特別〟――上司に呼び出されているとか、書類のかきかえをしなくてはならぬといった――ではないこともたしかなのだ。このときめきは、たしかに、何かよいことを前にしたそれ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でしかない。

しばらく考えてみたが、何も答えらしいものを見出せぬままに、とうとうリーはあきらめた。そのままベッドによこたわって、あてもなくあれこれと思いを遊ばせる。

見なれた室内は、べつだんりっぱでも豪華でもなく、とりたてて設備がととのっていたり清潔だというわけでさえなかったけれども、しかし毎朝夕に見なれた品々や家具の配置に目をやることは、リーに云いようもないなぐさめとやすらぎとを与えてくれていた。

それもこれも、リーがアンナと二人で選び、ととのえてきて、結婚してからの何年間かにすっかり古び、目に馴染んだものばかりだ。考えてみると、もう結婚してからずいぶん長いことたつのだと、いまさらのようにリーは思った。妻とは、コンピュータで共同生活指数が最良だったので結婚した。とても情熱にみちて求めあって結婚した、といってはうそになるだろうし、リーにせよアンナにせよ、そういうタイプではないが、しかし一人息子もそろそろ六つになろうかという夫婦はもうすっかり安定して、他の人間の入りこむ余地のないしっくりとした関係をきずきあげている。

それにアンナは、まだじゅうぶんに魅力的だ——リーは妻の寝すがたへ目をやった。まだしなやかで余分な肉もない曲線は妻の自慢のものだ。背もたかく、姿勢もいい妻は、何を身につけても着ばえがして、よくリーは同僚に妻のことでからかわれたり、ねたまれたりする。妻の貞節にじゅうぶんな確信を持っていれば、それはそれでなかなか、まんざらでもないことだった。

まずは、だから、幸せな方——といわねばならないだろう。何も、ひっかかりや当座の心を重くさせる悩みごとはない。もう若くはないが、まだ若いといってもよい年だ。妻との仲もよい。妻はなか

なかの美人で、そして、リーは人工受精技師として安定した評価と収入を得ている。それは将来、ますます重要になってくるであろう仕事だし、彼にはよくあっていた。

これからさき、とてもパッとした未来がひらけている、といったことではないかもしれないが、それはリーのほうで望んでいない。もともとが地味で、地道な性格なのだと自分でも思う。リーは、分にすぎたことがいちばん嫌いなたちだった。

だから、いまの仕事にも、収入にも満足している。妻にも、妻と築いている家庭にもだ。これだけでも、めったにないくらい、幸運だといわなくてはならぬだろう。彼の友人で、何かしら悩みやもめごとを、かかえておらぬ人間の方が少ないことを考えればである。

(それにおれは、アンナを愛している)

胸のいたむ思いで、リーはもういちど思った。

(むろん――リロイもだ)

のろのろとベッドから身をおこし、息子のベッドをのぞく。リロイはくちびるの端をぎゅっと吸いこんで、小さな拳を握りしめてよく眠っていた。栗色の髪は妻ゆずりで、目鼻立ちはどちらかというと父のリーに似ていると誰もがいう。リロイは天才児で、とても先の楽しみな子どもだった。I・Qが、このまえの五歳児の測定で二百三十あったのだ。

(いったい、誰に似たものか)

リロイを見守るリーの思考は、誇りと満足と期待にはちきれんばかりであった。誰に似たのか――と思う心の内側には、むろんそれなりの自負がひそんでいる。リーも、アンナも、I・Qはごく優秀

だし、アンナの父親はきわめて位のたかい、科学者ギルドのリーダー格の学者の一人である。
（あまり、頭がよすぎない方が、人間としてはむしろ幸せかもしれないが。せいぜい、おれぐらいの方が）
リーは一人でくすりと笑い、立っていってやさしくリロイの毛布をかけなおしてやり、自動調理機に朝食のインプットをし、コーヒーメーカーをセットしてから、服をきがえにかかった。
リロイがかすかな声をもらして寝返りを打つ。起きたか、とハッとして見守るが、そのままた夢のつづきへおちてゆく。この年ごろの眠りは、ふかく、悩みもないのだろう、安らかですこやかだ。
（あのころは――いい）
リーは寝衣をぬぎ、ディスポーザーに放りこんだ。勤務用の服の一そろいの新しいセットが、バサリと音をたてておちる。ペリペリとうすいプラスチックをはがし、身につける間に、目はTVのニュースを追っている――たえず下から上へと消えてゆく今朝のニュースの見出しは、例によって例のとおり――「政府、減産政策を妥協、部分的撤退」――「火星線で小事故、一人負傷」――「人工臓器法、百五十二対四十一で可決」――「来年度食糧政策委発足」――「『宇宙の英雄』帰還、三人の生命を救ったアイ・B・ベーカー」――「オセアニア、新爆弾実験を強行」――「今日から愛緑週間」……要するに、大きなニュースはない、ということだ。
何だか、生まれてこのかた、ずっとこういう朝を迎えてきたようだ――ふと、わいてくるコーヒーの香りと音のなか、リーはそんなことを考えて、鼻白むものを覚えた。
そのころまでには、朝おきたときのあの何とはないひっかかる感じ、妙な異和感は、きれいに消え

去っていて、ほとんど忘れてしまっていたのだ。
こぽこぽこぽ――という、コーヒーのわいてくる音。どんなに科学が進歩しても人間の決してすてられぬ習慣というのはあるものだ。たとえばコーヒーをいれること。――むろん、水を注ぐだけであついコーヒーになる合成コーヒーや、カフェイン錠、何だってあるのだが、リーは昔どおりフリーズ・ドライの粉をセットして湯をわかす。それが贅沢とか、ゆとりというものではあるまいか。
あるいは、肉眼で、活字を読むこと。それは、滅びてしまうだろう、そして本はマイクロ・フィルムに全面的にとってかわられるだろう、と、だいぶまえから、何度も科学者たちは予言していたものだ。しかし、本はいっこうにほろびはしなかった。活字を、読む、という行為そのものにいわば、象徴的な意味があったからだ。それに、本をよむのと、マイクロ・フィルムで必要なデータを得るのとは、まるで性質がちがう。
結局、少しばかり文化が進もうが、基本になる、人間の生活そのものというのは、かわりようがないのかもしれない――シェービング・バブルをやせた顎にぬりつけながらリーは考え、ゆっくりと窓のところによっていって下を見おろした。
めまいのするほどに、見なれた、たしかな光景がひろがる。自動走路にのって出勤してゆく人々の頭の列が、家々のドアから走路へとうごいてゆく。銀色と白、明るく、屈託のない、『いつも』。
「早かったのね。おこしてくれればよかったのに」
アンナの柔らかな声をきいて、ふりかえる。リーは、妻の声が好きだった。それは、婚約時代の甘やかな夢を思い出させる。甘い夢がたしかな現実に少しづつとりかえられていったいまでもなお、美

しくて低い、じっときいていたくなるような声だ。
リーは窓のそばをはなれ、アンナにお早うのキスをするまえに、指さきでシェービング・バブルをていねいにぬぐいとり、ティシューでふきとった。白い泡に混りあった細かなひげをティシューに包みこんでディスポーザーに放りこみ、コロンをつけてから、アンナを抱きよせてキスする。アンナは寝衣をぬいで、ゆったりした部屋着をまとっていたが、髪はまだ結いあげずに背にたらしたままだ。
「何を見てらしたの？」
調理機に歩みよりながら、アンナはきいた。
「街だよ」
「何か、面白いこと？」
「いや。――いつもいつも、同じだなと思ったのでね。……こんなふうに思ったことはないかい。じっさいには、われわれが、宇宙暦三Cの現在に生まれ、くらしているというのは、たんなる偶然にしかすぎない。B（ビフォア・スペース）・S何世紀のごみごみした、汚らしい大都市でも、さらに大昔のB－C何世紀のナイル――そういうんだったな――川のほとりの石の都でも、実はわれわれの存在の位相といったものには、何のかわりもない。朝はつねに朝であり、太陽が照らし出すのが、火星のドームであれナイルのほとりのアドービ煉瓦の四角い家（それを彼はゆうべのTVの特別番組で見たのだった）であれ、A・S3Cのメガロポリス・シティのユニット群であれ、人はおきて、顔をあらい、朝食をしたため、職場にいそぐ――なんとも、ふしぎなことだ、そういう気はしないかね？」
「おかしな方ね！」

アンナはくすくす笑いながら、トレーにのせたリーの朝食を運んできて、壁のスイッチをおしてはめこみ式のテーブルをとび出させた。
「一体、どうしたの？　やっぱり、きのうの古代史特集の影響なの？」
「そうともいえるし、そうでもない、とも云える。ぼくは、好きなんだ――自分自身を、時の大いなる河の内の、一粒の砂、と考えるのがね。それは自分自身、という枷から、一瞬たしかに自己の浮遊する自由さを与えてくれる」
「あなたって、哲学者になるべきだったのかもしれないわね。タバスコは？」
「いらない。ぼくは、タバスコは好きじゃないんだ。ウインピーをとってくれよ」
「これ、目にわるいって話よ」
「いいさ。どうせ、毎日いろんな形でわるいものばかりたべているんだ」
アンナはリーといっしょには朝食をとらない。リーは、いつも出かけにアンナとリロイの朝食をセットしていってやるのだ。アンナはリロイといっしょにたべ、それからリロイを幼児ギムナジウムへ送ってゆき、その足で彼女の職場である調整機構へ出勤する。アンナは調整技師なのだ。アンナはコーヒーだけいつもリーと一緒にのんだ。
それで彼女はプラスチックのカップに二人分コーヒーをつぎわけ、ゆっくりとすすりながら、TVを眺めたり、髪をゆいはじめたりしていたが、やがて、思いついたように云った。
「それでもやっぱり、アドービ煉瓦（というんでしょ、リー）の家の古代人たちとは違うわよ。とてもおかしな気分ね――私、そのことを考えると、ひどく妙な気持になるわ。――かれらは、なんて不



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com